



文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.5
March 2007

CONTENTS

- 文化・芸術インタビュー:吉川祐子さん
「文化遺産としての富士山
—仰ぎ見る美しい姿に人々は豊穡と幸福を祈ってきた—」
- 平成18年度の文化・芸術研究センター長特別研究
バーチャルミュージアム「産業考古学館」の研究2006
- ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて
SUACのメディアアート戦略に関する研究
- 文化芸術セミナー
ベートーヴェンのアンサンブル 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2
- インフォメーション

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



民俗文化研究所代表
中京女子大学
子ども文化研究所客員教授
吉川 祐子
Yoshikawa Yuko

—富士山をユネスコの「世界文化遺産」に登録申請する動きが具体化していますが、日本人にとって富士山とはどのような存在だったのでしょうか？

日本に住む人びとにとって、富士山は遙か昔から特別な山でした。ひときわ高く、独立した美しい姿、さらに時代によっては噴煙を上げていたこともあり、「コノハナサクヤ姫」の伝説を生み、「竹取物語」にも登場しています。知名度は抜群で、地元の美しい山を富士に見立てた「○○富士」が全国各地にあり、和歌にも詠まれ、浮世絵にも描かれてきました。当時の都(京都)から富士山は見えませんが、東国との往來の途中で目にした者はその美しい姿を盛んに伝えたことでしょう。また江戸(東京)をはじめ、関東一円には富士山がよく見えるポイントがたくさんあります。美しい山は他にもありますが、注目度、関心度という点で、富士山は絶対的な存在だったと思われる。

—富士山は古くから信仰の山でもありました。「浅間神社」や「富士講」なども有名ですが、他の山岳信仰と比較して特徴的なことはどのようなものなのでしょうか？

高くそびえる山は古来「神が居る場所」としてあがめられ、神が居る場所に登ることは、とても神聖なこととされてきました。山岳信仰に関わる山は全国各地にあるのですが、富士山と信仰との関わりは12世紀の中頃、末代上人が山頂に大日堂を建てたという記録に始まります。有名な「富士講」が広まったのは江戸時代からで、食行身祿という人物が大いに広め、江戸を中心に関東一円で特に盛んになりました。ひとつの講は50人~100人程度の規模で、男女混合、最盛期には「八百八講」といわれるほど多くの講が存在し、毎年富士に登るので、登山口の吉田(山梨県)などは大変な賑わいでした。女性やお年寄りなど実際に富士に登れない人たちは『富士塚』という富士に模した塚を江戸の市街地に築き、そこに詣でするという習慣もありました。

民俗文化研究所代表 吉川祐子氏に聞く

— 仰ぎ見る美しい姿に人々は豊穡と幸福を祈ってきた —
文化遺産としての富士山

富士講は小谷三志などに引き継がれましたが、小谷が説いた「不二道」は先祖供養や修行などの信仰というより、富士に登ることで「ミロク」の世を体験し、作物は豊作になり商売は繁盛する、皆が幸福になれる、という現世での利益のための信仰が中心でした。

何より富士講は、夫婦はますます円満で子にも恵まれるという、男女の和合を説いています。現代社会に最も欠落している、家族の愛の大切さを唱えていた集団といえるでしょう。また、日本では神聖な場所は(相撲の土俵などと同様に)「女人禁制」というところが多く、女性は足を踏み入れられません。大峰山(奈良県)などでは、今日でもそれが守られています。これに対して富士山は「女性が登れる山」だったのです。といっても60年に一度だけ、「庚申の年」に二合目まで、という制限つきでしたが。そうはいても、富士講は最もはやく女性に山を開放した集団といえます。富士山は、「女性への開放が早かった山」という点に、女性として大いなる文化的価値を認めます。

—「文化遺産としての富士山」について、どう思われますか？

世界文化遺産への登録申請ということになると、対象となる資産を特定し、その文化的価値をどう評価するか、ということになるのですが、富士山の真の魅力はそれだけにとどまるものではないと思います。実際に富士山を見れば誰だって清々しく、心が豊かになり、しあわせを感じますよね。新幹線に乗っていても、車窓に富士山が見えれば、思わず仰ぎ見てしまうでしょう。最近の「スーパー銭湯」では見かけませんが、かつて銭湯の壁に描かれる絵は富士山と決まっていた。富士山を仰ぎ見るしあわせ、安心感、心の安定などといった精神的な意味での文化的価値にもっと注目したいと思います。

静岡県は山梨県とともに世界文化遺産への登録を申請し、空港の名称にも使用して、富士山と静岡を大いにアピールしていく姿勢を打ち出していますが、富士山の持つ意味や価値をさらに広くとらえ、古くからの開放性、広域性をよく理解しながら、「静岡の富士」ではなく、「日本の富士」を広報していくことが大切なのではないでしょうか。

最近の少々ギスギスした世の中で「富士山を眺めてしあわせな気分を味わう」ことはとても素晴らしいことです。そのように考えれば、「いつでも富士山が見られることのしあわせ」を静岡県民みんなが感じられるし、その「しあわせ」が静岡県を訪れる多くの人たちにも伝わっていけば、こんな素敵なことはないと思います。(構成 富田晋司)

バーチャルミュージアム「産業考古学館」の研究2006 ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて SUACのメディアアート戦略に関する研究

平成18年度の文化・芸術研究センター研究プロジェクトとして、センター長特別研究費の配分を受け3つの研究が行われました。そのうち2つの研究の報告をします。

平成18年度 文化・芸術研究センター長特別研究

「SUACのメディアアート戦略に関する研究」

長嶋 洋一(文責・メディア造形学科 助教授)
大山千賀子(芸術文化学科 教授)
古田 祐司(メディア造形学科 教授)
佐藤 聖徳(メディア造形学科 助教授)
的場ひろし(メディア造形学科 助教授)
和田 和美(メディア造形学科 講師)

本学の特長である芸術文化マネジメント、デザイン学部のアートとサイエンス(技術と感性)の結び付いたメディアアートを、将来に向けたSUACの重要な柱の一つとして研究している。文化/芸術/デザインの交流領域である「メディアアート」を軸にした、2001年-2005年の学長特別研究、および2006年の文化・芸術研究センター長特別研究(継続中)について報告する。

1. 2001年-2004年の活動 - MAF

SUAC開学の翌年の2001年より、文化・芸術・デザインの交流領域である「メディア・アート」を軸にして、国内外の専門家との交流・作品展示/パフォーマンス発表の場としての「メディアアートフェスティバル(MAF)」や国際会議、シンポジウム等を開催してきた([1-8])。また、国内十数大学の参加するインターカレッジという学生作品イベントにも2000年より毎年発表参加し[9]、浜松地域の企業/大学との研究会(HMACS)活動なども行っている。この詳細は、『静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.5. (2004)に「メディアアート研究拠点化についての研究(1)」として報告したので参照されたい。

2. 2005年の活動 - MAS2005

4年にわたり開催したメディアアートフェスティバル(MAF)および国際会議NIME04を総括する意味で、2005年にはメディアアートシンポジウム2005を開催した[10]。ここでは、情報科学芸術大学院(IAMAS)の作曲家・三輪真弘氏を招待しての講演とともに、「SUACでのメディアアート活動」という報告を行った。あわせて文化・芸術研究センターホール「冥想空間」を活用した空間演出インスタレーション作品の展示公開、さらに翌年より「技術造形学科」から「メディア造形学科」と学科名を変更する節目に合わせて、オープンキャンパスの場において「メディア造形」についてのアピールを行った。この成果は、推薦入試においてメディア造形学科を希望する受験生が過去に例のない高倍率で殺到した事で、メディア造形

に対する社会の期待として実感できた。

3. 2006年の活動

—文化・芸術研究センター長特別研究

2006年には、例年に比べて約3ヶ月、特別研究の募集が遅れるという特殊事情の下で、新設された「文化・芸術研究センター長特別研究」に対して「SUACのメディアアート戦略に関する研究」として応募した。初めての試みとして、プロジェクトメンバーである両学部の教員6人がそれぞれ作家として作品発表を行う、という条件を設定し、これは後述のように、2006年12月22-25日に開催したMAF2006において実現された。

また、特別研究として募集されたテーマ「メディア造形の未来」に対応して、この2006年4月より新名称となってスタートしたメディア造形学科のプロモーション(社会的認知)に向けて、8月と10月に開催されたSUACオープンキャンパスでの学科紹介をMAFと並ぶ第二の目標として、(1)教員共同制作プロジェクトとして映像演出をテーマにしたインスタレーションの制作研究、(2)SUACナビゲーションコンテンツとアーカイブコンテンツの制作研究、というサブテーマを設定した。この成果としては、文化・芸術研究センターをオープンキャンパスの学科紹介会場としてフル活用し、多数の映像作品上映紹介、「冥想空間」でのインスタレーション展示公開、モーショ





ンライド(運転シミュレータ)体験試乗、多数のFLASH/Webコンテンツ作品体験展示など、メディア造形学科の広範な可能性を強烈にアピールすることに成功した。

4. メディアアートフェスティバル2006

過去のMAFでは全国のメディアアート作家への十分な作品募集期間があったが、MAF2006([11-12])は例外的に告知期間が短かったこともあり、従来のライブComputer Musicコンサートを行わず、期間も小規模として開催した。全体の概要としては、元IAMAS名譽学長(前学長)の坂根巖夫氏の講演会を目玉として、他に「ギャラリートーク(SUAC教員6名)」「インスタレーション展示」「メディア・パフォーマンス」「ムービー・シアター」「SUAC学生・CG/Photoギャラリー」「海外映像作品上映会」などを4日間にわたって行った。主催は静岡文化芸術大学・文化・芸術研究センターであり、後援は「静岡県・浜松市・静岡県教育委員会・浜松市教育委員会」であった。

来場した一般・学生から好評だったのは、特別研究プロジェクトメンバーの教員(古田祐司・大山千賀子・長嶋洋一・佐藤聖徳・的場ひろし・和田和美)がそれぞれ作家として参加した立場からメディアアートに関して語る、というギャラリートークであった。このギャラリーでインスタレーション作品を展示発表した作家は、佐藤聖徳(SUAC教員)・的場ひろし(同)・和田和美(同)・長嶋洋一(同)・田島悠史(慶應義塾大学SFC)・山口翔(SUACメディア造形学科学生)・牧田壮一郎(同)・嶋田晃士(SUAC大学院生)の8人である。またギャラリーにおいては、SUAC学生によるCG/写真作品を公募して、9人の学生の16作品のパネルを展示公開した。

また、映像の多層表示を行うインスタレーションシステムの教員共同制作プロジェクトの経過段階として、撮影スタジオの壁面をワイドスクリーンとして活用したメディアパフォーマンス

スを行った。メンバーのうち3人が参加し、的場ひろし(小型プロジェクタを持った複数のパフォーマー、液晶パネルを持った複数のパフォーマー)、古田祐司(3面スクリーンによる同期映像上映)、長嶋洋一(実写のライブ映像処理を伴ったComputer Musicパフォーマンス)、という意欲的なプログラムを3回公演として開催した。

文化・芸術研究センターを会場とした「ムービー・シアター」では、芸術文化学科(大山ゼミ)の学生映像作品、指導教員である大山千賀子の新作、日本大学・静岡県立大学学生の映像作品、さらに英国キングストン大学の学生作品集を「冥想空間」において上映した。アニメーション、CGなどの映像作品については、メディア造形学科の学生作品、卒業制作作品集、卒業生の作品集などが多数のプロジェクタとディスプレイによって上映された。



5. MAF2007、さらにメディア造形の未来へ

文化・芸術研究センター長特別研究テーマ「メディア造形の未来」は、単発的なものでなく、両学部の連携とともにメディア造形学科が中心となって、SUAC独自のアイデンティティと地域への貢献を求めていくつもりである。興味ある方々の参加、コラボレーションなどを期待している。

参考URL

- [1] <http://1106.suac.net/SS2001/index.html>
- [2] <http://1106.suac.net/SS2001/MAF2001.html>
- [3] <http://1106.suac.net/MAF2002/index.html>
- [4] <http://1106.suac.net/MAF2002/MAF2002.html>
- [5] <http://1106.suac.net/MAF2003/index.html>
- [6] <http://1106.suac.net/MAF2003/MAF2003.html>
- [7] <http://1106.suac.net/MAF2004/index.html>
- [8] <http://suac.net/NIME/report04/index.html>
- [9] <http://1106.suac.net/news2/installation/index.html>
- [10] <http://1106.suac.net/MAS2005/index.html>
- [11] <http://1106.suac.net/MAF2006/index.html>
- [12] <http://1106.suac.net/MAF2006/report.html>

平成18年度 文化・芸術研究センター長特別研究

「ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて」

古瀬 敏 (文責・空間造形学科 教授)
阿蘇 裕矢 (文化政策学科 教授)
根本 敏行 (文化政策学科 教授)

すでにご存じのように、ユニバーサルデザインは静岡県そして浜松市における行政施策の中心となっていて、本学の設立理念の一つとしてもユニバーサルデザインが挙げられている。しかし、ことばとして挙げるだけではそれが実現されることを意味するわけではなく、着実に根付かせるためには、さまざまな努力が必要であることは言を俟たない。本学では、この分野における実績を持つ教員が多数在籍しており、その経験と知恵とを活用することが実践に大いに寄与することから、本研究を立ち上げたものである。

初年度である平成18年度は、10月に京都で開催された第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議における積極的な参加ならびに情報収集と、当該会議に出席した海外専門家による本学での講演を主要な軸とし、さらにとくに浜松市における今後のあるべき姿の検討を開始した。

1) 国際会議に関しては、古瀬敏教授が論文審査委員長として応募してきた論文の査読の手配、そして査読結果を検討しての最終的採否に関与した。そこで、2002年に横浜で開催された前回会議の成果をふまえ、この分野における世界の最近の動向を把握するとともに、わが国からの発信が適切になされるよう心がけた。

当初の発表募集時には、日本での成果に関しては和文での応募も許容され、さらに国際的に情報を共有するという会議の本来の趣旨が十分に伝わらなかったきらいがあり、修正されて最終的に提出された論文も英文は要旨のみで本文は和文というものが少なからずあって、積極的な参加を掘り起こすという事務局の意図は達成されたものの、情報の共有という側面からは悔いが残った。しかし、2002年に開催した横浜での会議に比べれば、会議開催を契機として2003年秋に設立された国際ユニヴァーサルデザイン協議会の積極的な動き(そもそも今回の会議の主催が同協議会である)のおかげで、わが国の民間企業の取り組みに関する報告数が格段に増え、NPO活動の報告も前回と比較して多かった。

なお、今回の国際会議で設定された自治体からの発信という全体会合に関しては、静岡県知事が海外出張と重なってパネリストに加わるができなかったため、他の自治体首長が登壇して発表することになった。国際的にアピールするチャンスを見失ったのは、ユニバーサルデザインを施策の中心に据えることを他に先駆けた静岡県にとっては残念だったといえよう。

2) 京都での国際会議に参加した専門家を浜松に招いてユニバーサルデザイン国際セミナーを開催する企画は、10月28日(土)午後には本学において実施された。

2003年度と2004年度に続けて開催した同様なセミナーでの講演内容を意識し、今回は火災などの非常時における建築物からの避難をどう考えるか、というテーマと、日本における製品などのユニバーサルデザインは海外からはどう見えるか、というテーマを選び、米国と英国の専門家の講演をお願いした。

まず古瀬教授から、おさらいの意味も兼ねてユニバーサルデザインの一般的状況を報告した後、米国のエドウィナ・ジュイエ女史から避難安全に関わる話題提供をお願いした。米国では1970年代後半より、身体障害者などの建築物からの避難安全の問題が継続して議論されてきており、ジュイエ女史は一貫してその流れに関与してきている。米国では、大きな災害が起きるたびにその影響がどうか、どう変わるべきかが関係者の間で議論されてきているが、とくにこの数年に起こったさまざまな災害は連邦政府や州政府に的確な対応を迫っている。2001年9月11日の同時多発テロもそういった一連の動きの中で議論がされているし、さらにニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリーナによる問題なども対応が考えられていることから、こうした一連の動きなど、わが国に参考になることの紹介を受けた。

ついで、英国グラスゴウ美術大学デザイン学部のアラスデア・マクドナルド教授から、わが国におけるユニバーサルデザイン



の動きが海の向こうからどう評価できるかについて、話題提供をいただいた。マクドナルド教授はこの2年ほど、京都の立命館大学に滞在して日本のユニバーサルデザインの状況を調査研究するとともに大学院の学生たちに教育を行ってきているので、その経験が紹介された。2004年初頭に話題を提供していただいた英国ロンドンの王立芸術大学のロジャー・コールマン教授からの講演と合わせて、わが国におけるユニバーサルデザインの特徴が指摘されたといえよう。

あいにく当日はさまざまな企画が並立し、また広報も十分ではなかったことから聴衆数は少なかったが、講演内容と質疑に関しては、共催いただいた静岡県のご協力を得てテープ起こしを行いWebに掲載した(下記注参照)ので、内容伝達の目的は果たしたと考えている。なお、当日は日英の逐次通訳以外に、手話通訳をお願いした。

3) ユニバーサルデザインの地域での実践のためには、当然のことながら地域で活動している人々との協働が必須である。2007年4月に政令指定都市となる浜松市においては、旧浜松市と合併で新たに加わった地域との間でさまざまな点で格差・温度差があると指摘されていたが、ユニバーサルデザイン室が行ったタウンミーティングで、ユニバーサルデザインについても同様な問題があることが浮き彫りになった。旧浜松市における「ユニバーサルデザイン条例」で達成されている水準は、新たに加わった地域にとっては現状よりずっと高い水準であり、ユニバーサルデザインの理念をお題目のように唱える前にとにかく自分たちの地域を同程度にまで引き上げてほしい、という意向が強く表明されたのである。

そうこうしているうちに、たまたま日本都市計画学会中部支部から打診があり、2007年2月26日に本学において地域連携シンポジウムを開催することになった。学会大西隆会長の基調講演の後、石川岳男まちづくりセンター長より「政令指定都市を迎える浜松市の都市課題と展望」、阿蘇裕矢教授が「環境共生のまちづくり」、古瀬敏教授が「ユニバーサルデザイン

のまちづくり」と題して講演を行い、その後根本敏行教授が加わってのパネルディスカッション「協働による浜松のまちづくり」を実施し、本学が浜松市のあるべき姿について市民向けに発信する場となった。

人口の高齢化、中心市街地空洞化、それに伴う自家用車移動と公共交通機関利用との綱引き、といった全国どこでも課題となっている点に加え、これまでほとんど例のなかった人口が集中している都心と過疎地域をともに抱える政令指定都市として、どのような都市関連施策を打ち出すべきか、市民の意識と専門家の経験に基づく知恵との組み合わせが求められる中で、今後に向けてのネットワーク構築が期待される。当然のことながらユニバーサルデザインは、あるべき姿を議論する上での中心的キーワードである。

引用など:

ユニバーサルデザイン国際セミナーの記録は、下記のページに置いてあるNew!の項目から質疑を含めて4つのワードファイルとしてダウンロード可能である。なお、2004年の講演の記録もそれより少し下から探すことができる。
<http://homepage2.nifty.com/skose/KoseHPJ.htm>



講演はパワーポイントを用いて行われたが、日英の通訳と手話通訳が手配された。

平成18年度の文化芸術セミナーは、3つのイベントや講座が行われました。ここでは浜松・静岡・東京の3会場
で古楽器を使って行われた室内楽演奏会について報告します。

ベートーヴェンのアンサンブル 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2

小岩信治 (芸術文化学科 講師)

2007年1月13日、再び200席超の来場者を迎えたアクトシティ浜松音楽工房ホールで、「ベートーヴェンのアンサンブル - 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2」が開催された。この演奏会は、浜松市楽器博物館の楽器(フォルテピアノ:古楽器としてのピアノの総称)を使い、フォルテピアノ演奏の第一人者小倉貴久子氏を主要な奏者とする室内楽演奏会シリーズの一部である。前年度に引き続き今回もほぼ満席となったことは、この企画に対する市民の高い評価の現れとみてよいだろう。

昨年とやや異なるのは、小学生の来場促進のために優遇措置を実施したことである。年末年始の慌ただしいなか、本学に隣接する浜松市立東小学校ほか県西部地域のいくつかの小学校のご協力を得て、合計19名の、音楽に関心のある児童(小学校5年・6年中心)を招待することができた。後続の静岡公演では、同様に静岡市内の小学5・6年生に対して入場を優遇したほか、芸術文化学科片山泰輔助教授のゼミが主体となって、音楽専攻の愛知県の大学生の来場を促進した(「静岡発・古楽器で音楽の未来を拓くプロジェクト」)。こうして「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」は、将来のアートの担い手を育成し、社会とアートを結びつける活動の核としても機能しはじめた。

昨年から浜松・東京などで行なわれているこの演奏会は、従来の、また今日一般的なコンサートとは大きく異なる。

まず、浜松市楽器博物館が所蔵している世界的に重要な西洋鍵盤楽器のコレクションから、19世紀のフォルテピアノが毎年一台演奏に供される。世界に楽器博物館は数多くあるが、200年前の複数のフォルテピアノが演奏可能で、かつ館外での使用が許される例はきわめて少ない。このような企画によって、博物館の楽器が「見る」ものから「実際に音を聴く」ものになるのであり、それは浜松市民にとって「鳴り響く文化財」が活用されることを意味している。

第二に、演奏会のコンテンツが「新しい」ということがある。ショパンをテーマにした昨年、最も重要な演目であったのは《ピアノ協奏曲第1番》ホ短調作品11であったが、この曲を演奏すること自体は今日の音楽生活では決して珍しくない。実際、昨秋浜松で開催された「浜松国際ピアノコンクール」でも、この曲は《第2番》とならんで最終審査の演目の選択肢となっ

ていた。本学の演奏会ではそのような有名曲が、弦楽五重奏伴奏付きで演奏された。ショパンの時代の演奏習慣の最新の研究に立脚しながら、「アンサンブルの美しさ」を求める時代(木村尚三郎)のニーズを開拓するこの演目は、従来にないものであった。(世界的にみても、上記の作品の「室内楽版」をショパンの同時代の楽器で演奏した例は知られていない。)また同じ演奏会でとりあげられた《ピアノ三重奏曲》ト短調作品8は、決して「忘れられていた作品」というわけではないものの、今回の演奏が再評価の一つの契機になったといえよう。こうしたことは、芸術文化学科の平野昭教授と筆者による、西洋音楽史研究の成果の一部である。

しかしいかに古い楽器が演奏に耐える保存状態であり、また意欲的な演目を揃えることができたとしても、それを今日の聴衆に伝える演奏者が必要である。このプロジェクトにとって幸運であったのは、数年前から浜松市楽器博物館のフォルテピアノを演奏してきた奏者がいたことであった。上述の小倉貴久子氏である。小倉氏は、現代の楽器とは違う「古楽器」を前にしながら、また過去の演奏習慣を演奏に活かしながらも、決して過去の忠実な再現に向かうのではなく、あくまで現代の聴衆にアピールすることを忘れることがない。

さらに第4のポイントは、東京公演について協力関係にあるトリトン・アーツ・ネットワーク/第一生命ホールが、本プロジェクトが「浜松発、東京から世界に発信するコンサート」(岡田敦子)となるための決定的な存在となっている、ということである。昨年第一生命ホールで行なわれた公演は、小倉氏のさらなる評価に繋がっただけではなく、上記のような世界的に貴重なコンテンツを提供できる存在として、浜松そして本学をアピールする場となった。

こうして「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」は、その演目においても、また運営においても、さまざまな要素が組み合わせられた貴重な「アンサンブル」になっている。その内容は、昨年の東京公演の主要部分がNHK-BS『クラシック倶楽部』で放映され、また昨秋に浜松市楽器博物館CDコレクションシリーズ9(LMCD-1828、ショパンの《ピアノ三重奏曲》および《ピアノ協奏曲第1番》ドイツ初版による「室内楽版」を収録)が発売されたことによって、視覚的にも録音としても本格的に世界に発信されることになった。

来年度まで3か年にわたって行なわれる「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」は、上記のようなプロジェクトの特色を活かしながら、一貫したテーマのもとに構成されている。それは、ピアノという楽器とピアノ付きアンサンブル音楽の変貌である。19世紀序盤のピアノは、現代のものとは異なる特性を持ち、地域ごと、個体ごとの違いが明確であった。また弦楽器とのアンサンブルのなかで、20世紀のピアノとは明らかに異なる魅力を放っていた。しかしやがてピアノはかなり標準化され、「わたしたちが知っているピアノ」に近づいてゆく。そのことを端的に示すのがピアノ協奏曲というジャンルである。このジャンルは、モーツァルトやベートーヴェンはもとより、ショパンやクララ・シューマンの時代、つまり1830年代まで、オーケストラ曲でも室内楽でもあり得たのであるが、やがて「室内楽としては存在できない」、大オーケストラとパワフルなピアノが対峙するための音楽としてその姿を確立する。この変化を演奏会という形で、いわば「音による博物館」のなかで描き出すことによって、ピアノ音楽史、ひいては西洋音楽史の新たな視野が開けてくるのである。

このようなシリーズの第2年として、本年はベートーヴェンの作品が演目に挙がっている。ベートーヴェンは、今日の「クラシック音楽」つまり西洋芸術音楽のレパートリーを具現する象徴的な存在であるが、彼の生きた時代について、また彼が格闘していたピアノという楽器について知れば知るほど、あの「いかめしい」ベートーヴェン像が歴史のなかで「削ぎ落とされてきた」ものが見えてくる。

ベートーヴェンという作曲家は、まだ「マシン」として不安定なピアノを前に、豊かな発想と将来への展望との絶妙なバランスのなかで作曲し続けた人である。そのことを示すのが、《ピアノ協奏曲第4番》「室内楽稿」をはじめとする今回の演目（Bプログラムを含めて計6曲）であり、それによって今回の演奏会は、一般に流布しているものとは異なるベートーヴェン像を提示することになる。確かに一面で彼の音楽は「運命」を直視した厳しいものである。しかし他方で、彼の若く輝かしい響きは、今回のシリーズのシンボルとなっているホルネマンによるベートーヴェンの肖像とともに、ベートーヴェンという作曲家とその音楽の多様性を明らかにするはずである。20世紀のピアノ、20世紀の「クラシック音楽という制度」は、彼のそのような多面性を覆い隠す一つの「創出された伝統」であった。

本プロジェクトの「知られざるベートーヴェンの音楽」はさらに、現代の音楽と人間の関わりについてもさまざまな示唆を与えることになる。

放送や録音がない時代、ベートーヴェンのオーケストラの

ための音楽をフル編成で聴くには、生演奏の場所に立ち会うしかなかった。けれども、今も昔も変わらないことではあるが、大オーケストラを揃えて大きな会場で演奏会が催される機会は限られている。ベートーヴェンの音楽が知られて、また評価されていったのは、この時代の人々がつぎつぎに演奏会に押しかけたからではない。そうではなく、演奏機会の限られた音楽が流通して行くためのメディアがあったのである。それがこの演奏会シリーズで毎回取り上げられている、オーケストラ作品の「室内楽版」である。今回はピアノ協奏曲だけでなく、《交響曲第2番》もピアノ付き室内楽として演奏された。現代社会の音のなかに生きている私たちは、当然ながらベートーヴェン時代の人の耳で音楽を聴くことはできない。けれどもこの演奏会には、過去を振り返ることで現代の人間と音楽について考えるさまざまなヒントがある。小さな空間で、共感しあう仲間とともに聴き入る、生演奏の音楽。大ホールで大オーケストラの演奏で大人数の聴衆の一人として聴く音楽ではなく、限られた人数でもそこに立ち会った人に豊かな音楽体験をもたらすようなパフォーマンス。これを現代において実現しようとすると、大人数の来場者を動員できないために、興行的には困難をとまなう。けれどもそのような音楽と人間が共鳴し合う小さな音楽空間が、故木村学長の言を俟つまでもなく、今求められている。そしてそのような時代の要請に応えるプロジェクトを作ってゆくのは、大学の課題である。

「世の中、変わってきたのではないのでしょうか。隊伍堂々の軍隊行進のような大シンフォニーよりも、室内楽のアンサンブルの美しさのほうがいい。」（木村尚三郎、NHK交響楽団機関誌『フィルハーモニー』2004年10月号における村上陽一郎氏との対談にて）

「ベートーヴェンのアンサンブル - 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2」の公演は、1月13日に浜松、2月8日に静岡、3月3日に東京で行われました。浜松と東京は昨年同様同一のプログラムでした。

「ショパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで - 静岡文化芸術大学の室内楽演奏会1」の詳細については、『静岡文化芸術大学研究紀要第7巻』に報告が掲載されます。

平成18年度 文化・芸術研究センター事業実績

研究拠点の形成を目指した研究活動と情報発信

①文化・芸術研究センター研究プロジェクト

- ・バーチャルミュージアム「産業考古学館」の研究2006
種田教授、佐々木教授、伊坂教授、望月教授
- ・ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて
古瀬教授、阿蘇教授、根本教授
- ・SUACのメディアアート戦略に関する研究
長嶋助教授、大山教授、古田教授、佐藤助教授、
的場助教授、和田講師

②ニュースレター「文化と芸術」Vol.5の発行

③研究活動支援

- ・学会開催支援、
日本美術教育学会(7/29-30)、イタリア学会(10/21)、
日本図学会(12/2-3)、伝承文学研究会(9/2-4)、
日本都市計画学会(2/26)
- ・特別セミナー支援
シンポジウム「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」(5/28)
(スイス・デザインの現在展関連企画)

平成19年度 文化・芸術研究センター事業実施方針(案)

1 研究拠点の形成を目指した研究活動と情報発信

①文化・芸術研究センター研究プロジェクト

センター長特別研究費のテーマにより採択された研究をすすめることにより、センターの特色ある研究活動を学内外にアピールし、研究拠点の形成をめざす。

②ニュースレター(センター情報誌)の発行

年2回発行、A4判8ページ程度
特集(2~3ページ)、研究センターの活動紹介、その他

③研究活動支援

- ・学会開催支援、特別セミナー支援
- ・独自資料収集・整備
- ・研究会活動支援
- ・学内外への研究成果・情報の発信

④大学院との連携

2 開かれた大学を実践する地域との交流

①公開講座、文化芸術セミナーの実施

特色を生かした公開講座の実施
教員による研究成果の発表を継続・拡大
学長を含む本学教員の講演会、研究発表の首都圏等での開催

②産学官連携の推進

- 受託研究、共同研究
- 産学官連携イベントの実施
- ビジネスフェア出展
- 関係機関とのネットワーク

③地域文化事業の実施、協力

④センターホール、ギャラリーの活用促進

開かれた大学を実践する地域との交流

①公開講座、文化芸術セミナーの実施

- ・公開講座
前期公開講座「もてなし」の文化学-心とものと空間から-
(5回、9/16-10/28)
後期公開講座「ヨーロッパ、そしてアメリカ~交差する人・文化・
社会~」(8回、11/11-1/13)
夏季公開工房(4メニュー、8/26-27)
春季公開工房(5メニュー、3/24-25)
特別公開講座「薪能」(10/10-12)
- ・文化芸術セミナー
ベートーヴェンのアンサンブル(小岩講師他)1/13(浜松)、
2/8(静岡)、3/3(東京)
メディアアートフェスティバル(長嶋助教授他)12/22-25(本学内)
オーストラリアの芸術と文化(池上助教授他)2/17(本学内)

②産学官連携の推進

- ・受託研究、共同研究
＜受託研究＞
行政評価システムの制度設計研究 田中助教授
産業機器のユーザーインターフェイス研究 望月教授
外国人市民の生活・就労実態調査委託研究 池上助教授
行政経営システム構築に関する研究 田中助教授 他
＜共同研究＞
Web3Dによる組立指示書開発 望月教授
- ・2006SUACデザインセミナー (8/23-24:本学内)
テーマ「デジタルものづくり」
(財)浜松地域テクノポリス推進機構、
(株)モアソングジャパン、下野機械(株)と共催
講演・連携事例発表、ワークショップ、体験講座
- ・デザインコラボ(ビジネスフェア)出展(10/12-14、しずおか産業
創造機構の主催事業)
- ・ビジネス・コンテスト参加(10/24、本学が加盟している「がんば
る起業応援ネットワーク」の主催事業)

③地域文化事業の実施

- ・薪能(学生プロジェクトが運営)(10/10-12)
第一夜 能講座
第二夜 現代劇「道成寺」、アフタートーク
第三夜 薪能
狂言「川上」、舞囃子「菊慈童」、能「織」

④センターホール、ギャラリーの活用

- ・学生、教員が企画する展示会、イベントに使用された

編集後記

本号の巻頭インタビューでは、民俗文化研究所代表の吉川祐子さんに、富士山に関わる様々なお話を伺いました。時代は変わっても美しい富士を見たときの爽やかな感動は変わらない、そのような感動の「見える蓄積」こそ、すべての人が共有できる私たちの「内なる文化遺産」ともいえるのでしよう。過去からの遺産を継承し、発展的に未来に繋げていく、人間の叡智が息づく多様な「文化」の姿を、本誌を通じて少しでもお伝えできれば、と思います。(ST)

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.5

March 2007

編集人：須田悦生、古瀬 敏、窪田晋司

発行：静岡文化芸術大学文化芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

R100 PRINTED WITH SOY INK
古紙配合率100%再生紙及び大豆インクを使用しています。